

禅林寺本『融通念仏縁起』と

能「三山」の上演あるいは成立

松岡心平

能「三山」において、融通念仏信仰が果たす役割については、すでにさまざまな議論がなされてきた。

私は、融通念仏を始めた大原の良忍聖をワキとする能「三山」では、融通念仏信仰が全体にわたって大きな役割を果たしているとする立場である。その一つ一つについては、ここでは詳述しない。本稿では、このような立場の上で、『融通念仏縁起』の最後の豪華本である禅林寺本の成立が「三山」の成立に大きく関わっているのではないか、ということを中心としてみたい。

世阿弥の時代(一四〇〇年前後)には、すでに、『融通念仏縁起』でクローズアップされた良忍に関する奇跡話が、『融通鞍馬』(廢曲)という能の中で展開されていたことが、竹本幹夫氏によって報告されている(『申楽談儀』所引不明小語小考―「とりわき神風や……」と(融通鞍馬)―、『鍔仙』四二八号、一九九四年十一月)。

少しさかのぼって『一遍聖絵』(二一九九)を見てもよい。この絵巻の第三巻第一段では、

熊野権現が一遍に対して「融通念仏すすむる聖」と呼びかけており、一遍の念仏なども融通念仏の性格を有していたと考えられる。

良忍(一〇七三―一一三三)によって始められた融通念仏は、江戸時代に至ってはじめて宗派としての成立を見るが、それ以前に、少なくとも二つの信仰的ピークを持っていた。一つは、弘安二年(一二七九)に清涼寺の融通大念仏会を始めた十万人導御の出現であり(二三〇〇年前後)、もう一つは、良鎮上人による『融通念仏縁起』の開板と流通(一四〇〇年前後)である。

ことに導御が始めた清涼寺大念仏会は、嵯峨の大念仏とも呼ばれ、ここを舞台とする能で観阿弥(一三三三―一三八四)が自作自演して大評判となったのが「嵯峨の大念仏の女物狂の物まね」(『風姿花伝』奥儀、別名「嵯峨物狂」)であった。これを世阿弥が改作して現在に至ったのが、能「百万」であるが、そこには一貫して、「捨て子であった円覚上人(導御)が寺に養育され、生き別れの母への再会を祈念して大念仏を弘めた」(伊藤正義氏による

能「百万」の解題、〈新潮日本古典集成〉『謡曲集』下)という物語が存在していた。

ちなみに、十万人(円覚上人)導御は、大和服部郷の生まれであり(細川涼二『中世の律宗寺院と民衆』第五章「法金剛院導御の宗教活動」)、つまりそれは観阿弥や世阿弥ゆかりの結崎近くの生まれであり、その結崎の地が中世から近世にかけて融通念仏信者の結集地の一つであったことは、井上幸治氏の論文「円覚上人導御の『持斎念仏人数目録』」(『古文書研究』五十八号、二〇〇四年二月)や、稲城信子氏の論文「大和における融通念仏宗の展開」(『国立歴史民族博物館研究報告』一一二集、二〇〇四年二月)などが、具体的に示すところである。

要するに、「百万」はもとより世阿弥が語る「融通鞍馬」などは、彼らの出身地の信仰を語る能でもありえた、と考えられるのである。

融通念仏の流れのもう一つの画期は、良鎮上人の出現であり、彼は布教の手段として絵巻物を選んだ。十四世紀の初め頃には原型が成立していたと見られる『融通念仏縁起』は、良鎮により多数製作されて全国に配られたが、良鎮は、「さらにこの絵巻を普及させようと、その本版化を企て」、「日本版画上、記念碑的作品である」(松原茂『絵巻・融通念仏縁起』至文堂、一九九一年)明徳版本『融通念仏縁起』を製作した。明徳二年(一三九二)頃のことであった。

このヴァージョンの大きな特色は、下巻の巻末に清涼寺融通大念仏の導御による始行の事情とその絵が付加されたことである。

それは、観阿弥没後七年目の出来事であり、観阿弥が得意としていた「嵯峨の大念仏の女物狂の物まね」（「嵯峨物狂」）が、世阿弥（一二六三〜一四四三）により「百万」に改作されたのも、まずはこの時点を考えることができる。

応永年代に入って、良鎮は、『融通念仏縁起』をさらに貴賤上下に展開するために、上巻冒頭に天皇の勅筆を、下巻冒頭に將軍の肉筆を据え、多数の貴顕高僧の筆を添え、当時の著名な絵師六人の参加を得た超豪華な肉筆本である清涼寺本『融通念仏縁起』を勧進することに成功した。応永二十四年（一四一七）頃のことである。

この本では、上巻冒頭を後小松上皇が、下巻冒頭を將軍足利義持が担当したのをはじめ、世阿弥のパトロンであった管領細川満元（下巻第三段を担当）なども加わっている。もちろん明德版本で付加された清涼寺融通大念仏の段も栗田口隆光の新絵とともに含むものであった。この時点で、南都西大寺で失った我が子を求めて京都の清涼寺、大念仏最中の清涼寺へ道行し、最後に清涼寺の本尊、生身の釈迦仏を大々的に賛美する曲舞の段が世阿弥によって新作され、リニューアルされた能「百万」が舞われた可能性も大きい、と考えられる。

この清涼寺本『融通念仏縁起』を図様から料紙の装飾まで踏襲して引き継いだ豪華肉筆本が、良鎮上人を引き継いだ融鎮上人によって製作されたのが、禪林寺本であり、その成立は、足利將軍による安定期の最終末期、寛正

四年（一四六三）後半から同六年にかけてのことであった。

分担執筆の詳細については、前記松原茂氏の『絵巻・融通念仏縁起』に依られたいが、その識語群を見るに、下巻第二段の寛正四年閏六月二十九日の「前准三宮藤原」すなわち一条兼良からはじまって、下巻明德版刊記の寛正六年二月二十三日の「按察使」こと甘露寺親長までが貴族たちによる執筆期間で（なぜかこの本には有力武家層の参加がない）、その後、寛正六年の二月下旬から三月初旬にかけて、上巻冒頭の後花園上皇、下巻冒頭の將軍足利義政による執筆が行われ、三月六日から始まる嵯峨大念仏の開催に間に合わせて絵巻を完成させたと考えられる。

そして、この最後の豪華肉筆本『融通念仏縁起』の完成を祝うかのように、能「三山」の記録上の初見、『親元日記』寛正六年三月九日条があらわれるのである。その記事を見てみよう（増補史料大成本による）。

九日 丙辰 天晴

御院参御供二番、花御覧也能在觀世。栄公見物裏頭。

式三番

泰山府君（後音）、はるちか、松風村雨（音）、ふしき曾我、くらま天狗（後音）、三山、あたか、小町（音）、そとハ、三輪、しし（音）、ひやく万（御乞）、明恵上人（音）、しつか、天鼓（音）、鶏鶴歌、鳴不動（音）

〔音は音阿弥を示す。後音は後シテが音阿弥を示す。無記名の演者は

觀世又三郎だろう。御乞はアンコールのこと〕

冒頭に「御院参」とあるように、この記事は、前年七月十九日に天皇を退き院となっていた後花園の仙洞御所に、院執事となっていた將軍足利義政が参じて、觀世座の能を御覧に入れた、その記録である。約一年後には、「近來違和、衰老憔悴」（『蔭涼軒日録』文正元年「一四六六」四月八日条）となつてしまい、その翌年一月二日に死を迎える音阿弥が、まだ六十八歳で元氣であった頃の演能記録である。寛正五年四月の糺河原勸進猿樂あたりから始まり、とくに七月の後花園院政開始から翌年までの間は、三十六、七歳の觀世又三郎が盛りを迎え、音阿弥も健在であり、短期間ではあったけれども、足利義政や後花園上皇に向けて、觀世周辺で新作能が多く作られた一つの画期だったのではなからうか。

「三山」もそうした中の新作であった可能性が強いだろう。少なくとも、直前に禪林寺本『融通念仏縁起』の上巻・下巻の巻頭を書いた後花園上皇・足利義政に向けての「三山」上演は、時宜にかなうものであったし、じつは觀世の側でも、『融通念仏縁起』の豪華新本の進行・完成を横目でらみつつ、能「三山」の製作に励み、ここぞとばかり嵯峨大念仏開催中の三月九日に、新作上演に至ったのではなからうか。

アンコールに觀世又三郎の「百万」が掛けられたのが時宜にかなっていたのは、言うまでもないことである。

（東京大学名誉教授）